

### 第3節 常呂自治区の開拓

江戸時代文化5年(1808年)に柏谷喜兵衛(のちに藤野姓に変える)が漁場請負人として全道53場所、28人の請負人の一人として常呂に入っていました。

記録上に残る和人が定住したのは、明治13年(1880年)1月1日郡内戸数表調では「常呂川ハ古来網走川ニ次ケル鮭ノ産地ニシテ其の川ロニ番屋及ヒ[アイヌ]ノ部落アリ明治十六年戸長役場ヲ設ク時ニ[アイヌ]ノ外藤野ノ漁舎及ヒ和人一戸ノミナリシト云フ」とあり、この頃から和人定住が始まったと思われ、漁場の町として開けていきます。

明治28年(1895年)田村喜蔵を団長とする「土佐団体」29戸が入植、明治31年(1898年)岐阜団体が入植し、牧場経営を起すなど農業開拓ははじまりました。

この明治31年までに、常呂には官設駅通、網走・常呂二郡水産業組合(網走)、木造架設、常呂神社、常呂教育所(学校)、郵便局為替(貯金事務開始)、網走警察常呂分署が設けられていました。

### 第4節 北海道開削のため労働力確保の集治監

明治政府は、南進する帝国ロシア軍を警戒しオホーツク海沿岸での水際作戦に備える屯田兵(北辺の防衛と開拓の二つの任務を持った国の政策による北海道独自の兵制)を送り込むために、北海道の開拓は急務であり多くの労働力の確保が必要でした。

当時の明治政府には財政に余裕は無く、当時の高官金子堅太郎が「原始林の北海道民間に託したのではとんでもない賃金になるだろう、囚人を使えば開削費は半額以下ですむし、悪人なのだから作業で死んでも悲しむものもない、囚人の数が減れば集治監(監獄)費の節約にもなる。まさに一举両得であり今後も困難な作業は、囚人を使うべきだ。」というわけで開拓のために北海道各地に監獄を作る計画は進められています。

明治14年(1881年)現在の月形町に樺戸集治監が作られたのを皮切りに明治15年空知集治監、明治18年に釧路集治監と次々に北海道に受刑者(囚人)が集められました。

網走刑務所は最初「網走囚徒外役所」と呼ばれ中央道路開削工事のために明治23年(1890年)1,200人もの受刑者が送られました。

当時の受刑者には、殺傷犯罪の他、西南戦争で捕縛された不平士族や思想犯のような受刑者も開削のために送られてきています。



博物館 網走監獄監獄HPより

\* 詳細は、博物館網走監獄でガイド案内と3D映像があります。

\* 一部の文章は、博物館網走監獄ホームページから引用しました。